【研究ノート】

母親の育児不安の軽減につながる子育て支援の在り方の検討
A Study on a Childcare Support to Reduce Mother's Anxiety

前島　美保　原　まなみ　森下　順子

日本では少子化問題が社会で広く認識され、様々な施策が行われてきた。さらに核家族化や地域とのつながりの希薄化による育児中の母親の孤立や育児不安の増大等、家庭や地域の子育て機能の低下が問題視され、社会全体で子どもの育ちと子育て家庭の支援を行うことの重要性が指摘されている。

本研究では、母親の育児不安の実態と要因を明らかにし、母親の育児不安の軽減につながる子育て支援について考察するとともに、子育てに関する情報の有効的な広報の在り方について検討した。結果、子どもと母親の双方向の視点から、子育て支援の内容を検討する必要性が明らかになった。

キーワード：育児不安、子育て支援、母親、支援の在り方

1　はじめに

日本は、人口に占める高齢者の割合が増加する高齢化と、出生率の低下により若年者の割合が減少する少子化が同時に進む少子高齢化社会といわれている。2007 年には、明確な定義はないが、65 歳以上の高齢者が占める割合（高齢化率）が 21%を超えた「超高齢化社会」に突入しており、今後さらに進行が予測されている大きな社会問題の 1 つである。

少子化問題については、1990 年「1.57 ショック」により社会において強く認識されるようになった。最初の総合的な少子化対策として、仕事と子育ての両立に向けた雇用環境の整備や、保育所の増設、延長保育、地域子育て支援センターの整備等の保育サービスの拡充等が図られた「エンゼルプラン」が策定された。次いで 1999 年に「少子化対策推進基本方針」・「新エンゼルプラン」、2001 年に「仕事と子育ての両立支援等の方針（待機児童ゼロ作戦等）」等、子育ての負担の軽減や子どもを安心して生み育てることができる環境整備に重点をおいた対策が講じられてきた。次いで 2003 年には、「少子化社会対策基本法」、「次世代育成支援対策推進法」が制定された。

その後、子どもを主人公（チルドレン・ファースト）と位置付け、「少子化対策」から「子ども・子育て支援」へ考え方を転換した「子ども・子育てビジョン」が 2010 年 1 月に策定された。これは保育等の充実やワーク・ライフ・バランスの推進等の施策内容をより具体的に掲げ、社会全体で子どもの育ちと子育てを支え合う社会の実現を目指したものである。さらに 2012 年 8 月には、「子ども・子育て支援新制度」が成立し、認定こども園制度の改善や地域の子ども・子育て支援の充実が図られた。このように、国や地域では、子どもや子育て家庭を支えあう仕組みを構築し、安心して子どもを産み、育てられる社会と全ての子どもが健やかに成長できる社会の実現を目指している。

木脇は、現在の子育て支援政策について、「男女ともに働き方及び役割を見直し、母親に依存してきた子育てを根幹から見直す視点が必要である。」（木脇 2012 p.38）とし、社会構造の枠組みの中で、次世代育成について考える必要性について述べている。また加茂は、現代の日本の子育てにさまざまな困難があり、政府や地方自治体による子育て支援対策に加え、市民主体の子育て支援の必要性について述べている。そして、子どもが社会全体にとっての宝であり、その育成は社会全体にとって重要な課題であるという自覚をもって、孤立しがちな子育てを多面的に支えること

を市民主体の子育て支援の目的の一つと考えている（加茂 2007 p.20）。子どもの育ちと子育て家庭の支援を社会全体で行っていくことの必要性については、この他にも多くの先行研究で論じられている。

岡本(2015)は「地域子育て支援拠点事業」を利用する母親の育児不安の調査・分析から、子育てを通じた仲間づくりの援助が、母親の育児不安を軽減する効果をあげていることを明らかにし、育児不安全体の軽減のためにも、母親同士及び母親と地域の人々とのつながりをつくり出す必要性を示唆している。

中山は、塩尻市乳幼児検診を受診した母親に育児に関する生活実態と現在の気分についてのアンケート調査から、調査対象者の半数以上の母親が子育ての仲間を求めていることと、約半数の母親が専門家との相談を希望したり、家事育児の実際的なサポートを求めたりしているという結果を得ており、乳幼児育児中の母親は、孤立気味な環境の中で人とのつながりや専門的なサポートを求めていることを明らかにしている。しかし実際には、母親が専門家に相談したり、家事育児の実際的なサポートを求めたりすることができていない結果も挙げている（中山 2016 p.72）。このように育児中の母親が求める支援については、人とのつながりが求められているのである。これらのこと踏まえ、本稿では和歌山市における子ども・子育て支援事業の利用状況を調べ、その実態を知る。そして、子育て支援イベントを通して、育児中の母親が感じる育児不安や母親が求める子育て支援について実態や要因を明らかにし、今後、母親の育児不安の軽減につながるイベント等を企画する際に役立つ、子育てに関する支援内容を検討することを目的とする。また、普段の子育てに関する情報の収集方法を明らかにし、子育てに関するイベント等の情報を多くの人に届けるために、どのように広報することが有効であるのかについて検討し、子育て支援への貢献につなげていきたい。

2　和歌山市における子ども・子育て支援事業の利用状況

和歌山市では、子ども子育て支援法(平成 24 年法律第 65 号)に基づき、平成 27 年度から平成 31 年度までを計画期間とする「和歌山市子ども・子育て支援事業計画」を策定し、幼児教育・保育及び地域の子育て支援を充実する施策を総合的に進めてきた。そして令和 2 年度から令和 6 年度までを計画期間とした「第二期和歌山市子ども・子育て支援事業計画」の策定における基礎資料とするため、和歌山市子ども・子育て支援事業に関するニーズ調査を実施している。この調査における対象は、和歌山市内に居住する就学前児童の保護者2,500 人、小学生児童の保護者1,500 人、小学生・中学生・高校生約 1,000 人である。この調査結果報告書から、就学前児童の保護者を対象とした子育て支援に関する調査結果を以下に抜粋する（和歌山市福祉局 こども未来部子育て支援課 2019）。有効回収数は1,155(46.2%)である。

地域の子育て支援事業の利用状況（複数回答可）では、「地域子育て支援拠点事業（親子が集まって過ごしたり、相談をする場）」が 11.6%、「その他類似の事業」が 3.2%、「利用していない」は 85.3%であった。

子育てに関する不安感や負担感の有無では、「非常に不安や負担を感じる」と「なんとなく不安や負担を感じる」を合わせた「不安や負担を感じる」が 43.2%であった。

子育てについて気軽に相談できる先(複数回答可)では、「祖父母等の親族」が 84.7%、「友人や知人」が 74.4%、「保育所や幼稚園等の職員」が 34.5%であった。

子育て支援に関する（相談支援に関する）事業の認知度と利用経験では、「保健センターの発達相談・育児相談」が認知度 91.5%、利用経験 43.4%で、どちらも比較的多い。「保育所・幼稚園の子育て相談」や「こども総合支援センターの相談」については、いずれも利用経験が 10%未満で、認知度も 50%未満であった。

和歌山市の子育て施策等に関して感じることについて、「乳幼児健診の体制」が 64.8%、「小児医療体制」が 65.3%満足していると回答している。次の質問にはいと回答した割合は、「公園など遊び場が充実していると思いますか」では 21.3%「犯罪被害にあう事の少ない安全なまちだと思いますか」では 17.7%と評価が低かった。

和歌山市では、これらの調査結果を基に、社会情勢の変化やニーズを踏まえ、「第二期和歌山市子ども・子育て支援事業計画」を策定し、これまでの取組みを継承しつつ、さらに子どもの健やかな育ちと保護者の子育てを社会全体で支える環境の充実を目指している（和歌山市福祉局 こども未来部 子育て支援課 2020）。

3　方法

3.1　研究方法

和歌山市における子ども・子育て支援事業に関するニーズ調査結果を踏まえ、子育て支援イベントにおける子育て中の当事者への質問紙を通して、母親の育児不安の実態と要因を把握することを目的として、調査を行った。この子育て支援イベントは、和歌山信愛大学教育学部（以下、「本学」という）と東京医療保健大学和歌山看護学部（以下、「東京医療保健大学」という）との共同で開催したイベントである。

また育児不安と子育て支援に関わる先行研究を整理し、子育て支援に関する情報の収集方法を含め、母親が求める支援について考察し、母親の育児不安を軽減する支援の在り方について検討する。

3.2　対象

対象者は、和歌山市在住の 0 歳から 4 歳までの子どもをもつイベント参加者 55 名の親の内、質問紙調査に同意し回答が得られた 48 名である。調査票回収率は 87.3%であった。参加した父親が少数であったため、本稿では回答が得られた母親 43 名を対象とする。

3.3　子育て支援イベントについて

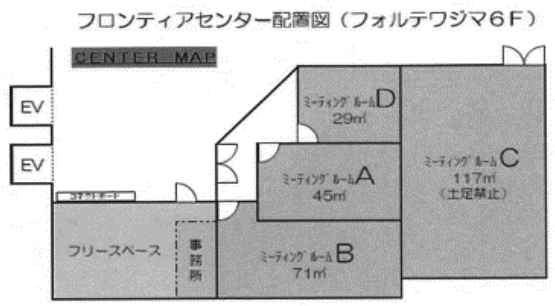
本学と東京医療保健大学との共同で実施した子育て支援イベントは、2019 年 11 月 30 日（土）午前の部 10：00～12：00、午後の部 14：00～16：00 の 2 回、和歌山市地域フロンティアセンターにて開催した。イベントのブースに関しては、中岡ら（2017）の「A 県における子育て支援イベントの実態」を参考に、学生自身が主体となって行うことが可能な「子ども同士が遊ぶ場の提供」「母親同士の交流の場の提供」「親子の触れ合いの場の提供」「子育て情報の発信」「子育て相談」の項目に沿って考案された学生主体のイベントである。親子で一緒に楽しむ場、地域交流の場、支援の輪を広げる場として参加者が 4 つのブースを自由に回れるように設置していた（図 1）。4 つのブースの項目とその目的は以下に示す。

①親子体操:親子で一緒に参加できることを目的とする。

②集いの広場：親同士の交流を目的とする。

③子どもたちの遊び場：子ども同士の交流の場を目的とする。

④子育て相談：気軽に相談できることを目的とする。



〈ブース〉

ミーティングルーム A：集いの場

ミーティングルーム B：親子体操

ミーティングルーム C：子どもたちの遊び場

ミーティングルーム D：子育て相談

図 1　イベントの配置図

3.4　子育て支援イベントにおける質問紙について

子育て支援イベントに参加し、研究協力に同意を得られた親に、質問紙による調査を実施した。質問紙内容は、対象の属性、子育てにおける不安や悩み・困りごと、普段の子育て支援に関する情報の収集方法、子育て支援において、どのような存在・場所があるとよいと思うか等を調査した。

3.5　倫理的配慮

本研究は本学と東京医療保健大学における研究倫理委員会の承認を受けて実施された。研究協力は自由意志であり、協力の有無により不利益を被ることはなく、本人の意思を最大限尊重する。また、研究対象者が質問紙提出前は辞退可能であることを保障する。本研究では質問紙への回答は無記名のため、質問紙が提出された後に、研究参加の同意撤回の申し出があった場合、対象者を分析対象から外すことは難しい。その旨を研究への参加を依頼する際に、文書と口頭にて説明した。研究の目的、方法、予想される結果、

社会への還元、個人情報の取り扱いについて書面で説明し、親から同意を得た。

4　結果

4.1　属性について

子育てイベントに参加した対象者の年齢は、「25 歳以上 30 歳未満」が 4 名（9.3%）、「30 歳以上 35 歳未満」が 16 名（37.2%）、「35 歳以上 40 歳未満」が 10 名（23.3%）「40 歳以上 45 歳未満」が 4 名（9.3%）、無効が 9 名（20.9%）であった。家族構成については、核家族が 25 件（58.1%）で、両親（義理の父母を含む）や兄弟姉妹と同居している家庭は 18 件（41.9%）であった。また現在の就労状況として、フルタイムもしくはパートタイムで就労している母親は 13 名（30.2%）で、育児休業中の母親は 18 名（41.9%）、就労していない母親は 11 名（25.6%）、無効 1 名（2.3%）であった。

4.2　母親の現在の不安・悩み・困りごとについて

子育てに関する母親の現在の不安・悩み・困りごとについて 22 項目（複数選択回答）を分類したところ、「母親自身の身体面での不安」、「母親自身の精神面での不安」、「子どもに関する精神面での不安」、「子育て環境に関する不安」、「その他」「不安や悩み、困っていることはない」の 6 分類となった（表 1）。「母親自身の身体面での不安」は合計 69 件、「母親自身の精神面での不安」は合計 49 件、「子育て環境に関する不安」は 22 件、「子どもに関する精神面での不安」は合計 15 件であった。

6 分類の中で、「母親自身の身体面での不安」が最も多い結果となり、特に「肩こり、腰痛、腱鞘炎などの身体の痛みがある」「身体の疲れが取れない」「睡眠不足」の 3 項目は、22 項目の中でも上位 3 位を占めていた。次に「母親自身の精神面での不安」が多く、内容は「家事が大変」が 15 件、「子どもができてから、イライラが増えた」が 11 件、「子育てに自信がなくなることがある」が 9 件と多かった。次に「子育て環境に関する不安」が多く、内容は「子どもが犯罪・事故に巻き込まれないか心配」が 10 件、「急用の時、子守りをする人がいない」が 9 件であった。「子どもに関する精神面での不安」では、「自分の育児方法が正しいのかわからない」が 11 件であった。「子どもをいとしい（かわいい）と思えない時があった」「母乳やミルクの飲みが悪い・悪かった」「子どもが泣き止まない」「不安や悩み、困っていることはない」を選択した母親はいなかった。

その他については、「好き嫌いが多い」、「週末仕事の時の預かり保育が少ない」という回答が挙げられた。「不安や悩み、困っていることはない」と回答した母親はいなかった。

表 1　母親の現在の不安・悩み・困りごと

分類	内　容	件数（件）	合計（件）
母親自身の身体面での不安	肩こり、腰痛、腱鞘炎などの身体の痛みがある	23	69
	身体の疲れが取れない	22	
	睡眠不足	21	
	乳房・母乳に関するトラブルがある・あった	3	
母親自身の精神面での不安	家事が大変	15	49
	子どもができてから、イライラが増えた	11	
	子育てに自信がなくなることがある	9	
	経済的な不安がある	6	
	自分の将来（仕事・生き方）に不安がある	4	
	精神的に辛い（孤独を感じる等）	3	
	日常のグチを言う人がいない	1	
	子どもをいとしい(かわいい)と思えない時があった	0	
子育て環境に関する不安	子どもが犯罪・事故に巻き込まれないか心配	10	22
	急用の時、子守りをする人がいない	9	
	子育てを手伝ってくれる人がいない	2	
	相談できる人がいない	1	
子どもに関する精神面での不安	自分の育児方法が正しいのかわからない	11	15
	子どもの発育状態が心配	4	
	母乳やミルクの飲みが悪い・悪かった	0	
	子どもが泣き止まない	0	
その他（　　）			2
不安や悩み、困っていることはない			0

4.3　育児の中で過去に一番悩んだことについて

育児の中で過去に一番悩んだことの質問では、母親の子どもへの関わり方に関する悩みが3件、子どもの食事面に関する悩みが7件、子どもの行動に関する悩みが5件、子どもの発達に関する悩みが3件、母親の家族との人間関係に関する悩みが2件、母親自身の体調に関する悩みが2件、子育てにおける環境に関する悩みが1件という回答が得られた。「子どもの食事面に関する悩み」では、「授乳」や「離乳食」に関する悩みが多く、「子どもの行動に関する悩み」では、「夜泣き」が悩みとして挙げられていた。

4.4　子育て支援に関する情報の収集方法について

子育て支援に関する情報の収集方法について11項目（複数選択回答）を外出先で情報収集できるものを「出向いて情報収集をしている」、在宅しながら情報収集できるものを「自宅で情報収集をしている」とし、友人・知人からの情報収集は、どちらの可能性も考えられるため、「友人・知人から情報収集をしている」とし、3つに分類した（表2）。「出向いて情報収集をしている」が54件、「自宅で情報収集をしている」が49件、「友人・知人から情報収集をしている」が3件という結果が得られた。

表2　普段の子育て支援に関する情報の収集方法

分類	情報収集方法	件数(件)	合計(件)
出向いて情報を収集している	チラシ	20	54
	子育て支援施設	16	
	保健センター	11	
	図書館	4	
	病院	2	
	フリーペーパー	1	
自宅で情報を収集している	インターネット	19	49
	アプリ	2	
	SNS	16	
	在籍する園から	9	
	自治会のHP	3	
	大学のHP	0	
友人・知人から	友人・知人	3	3

4.5　相談して気持ちが軽くなった人・場所について

相談して気持ちが軽くなった人・場所について、それぞれ複数選択を可能とした質問をしたところ、「相談して気持ちが軽くなった人」に関しては、選択した件数が多かった順に挙げると、実母29件、友人21件、夫18件であった。専門職の中では、幼稚園や保育所等の先生が13件と最も多く、次いで保健師が9件で、子育て支援施設のスタッフもその他として挙げられた。

また、「相談して気持ちが軽くなった場所」に関しては、子育て支援施設が15件と最も多く、次いで保育所、幼稚園、子ども園等の教育・保育施設が13件、次いで保健センターが9件であった。

4.6　母親が求める存在や場所について

どのような存在・場所があるといいと思うか、という質問では自由記述回答を求め、そこから共通カテゴリーを生成したところ、「子どもの遊び場」、「交流・仲間づくり」、「母親自身の時間確保・気分転換の場所」、「その他」に分類された（表3）。

表3　母親が求める存在や場所

カテゴリー	具体例
子どもの遊び場	・屋内で安全に遊べるスペース ・危なくない公園 ・子どもが自由に元気いっぱい遊べる場所 ・祖父母が近くにいて一緒に遊べる場所 ・親子で楽しめる場所 ・無料開放 ・色々な玩具をおいてくれているところ ・手遊び等、場面の切り替えができるところ
交流・仲間づくり	・色々な人との交流 ・軽い気持ちで話せる人 ・同年代の子どもをもつ親との交流 ・気軽に話せる友人
母親自身の時間確保・気分転換の場所	・頑張らなくていい場所 ・母がホッとできるような場所 ・リフレッシュできる場所 ・子どもと離れてランチやお茶ができる場所
その他	・支援センター ・有料託児施設

4 つのカテゴリーの中で、「子どもの遊び場」を求める自由記述が最も多く、具体的には、安全面が確保された場所や家族で一緒に遊べる場所、無料で利用できる場所等が挙げられた。次いで「交流・仲間づくり」に関わる存在や場所、そして「母親自身の時間確保・気分転換の場所」が求められていることがわかった。その他の意見として、支援センターや有料託児施設という具体的な施設名が挙げられた。

5　おわりに

本学と東京医療保健大学との共同で開催した子育て支援イベントにおいて、参加した親に、普段の子育てについて質問紙調査を行った。その結果、『子育てに関する母親の抱える現在の不安や悩み、困っていること』は、母親自身の身体面での不安の割合が最も高かった。次に精神面での不安が高く、内訳は子どもに関するものが、母親自身に関するものより少し高かった。「子どもをいとしい（かわいい）と思えない時があった」「不安や悩み、困っていることはない」を選択した母親はおらず、年齢を問わず、何らかの不安・悩み・困りごとを抱えているが、子どもはいとしい（かわいい）と思っていることがわかった。

『これまでの育児の中で一番悩んだこと』では、授乳や離乳食等の「子どもの食事面に関する悩み」が最も多く、「子どもの行動」、「子どもの発達」、「子どもへの関わり」と多い順に挙げられており、子どもの健康や発育、発達に関することが育児不安の要因となることを示唆している。この結果は、育児の悩みの項目数と種類において、子どもが満一歳になるまでに母親が持つ悩みが平均 2，3 個で、「子どもの育て方」や「子どもの発育・発達」に関するものであったという猪野（1995）の結果と同様であり、子育てに関して母親が抱える不安や悩み、困っていることは、「母親自身の体調に関する悩み」より、「子どもに関する悩み」の方が優先されるといえる。子育てに関して見通しがもてないことが、育児不安の要因となっているのである。

また『普段の子育てにおいて、相談して気持ちが軽くなった人』に関しては、実母が最も多く、次いで友人、夫の順であった。今回の調査の対象者で、実母と同居している者は 11 名で、その内「相談して気持ちが軽くなった人」に実母を選択したのは、9 名であった。身近に実母の存在がある環境で子育てしている母親は、実母に相談しやすいことが推測される。

『専門職の中で相談して気持ちが軽くなった人』は、幼稚園や保育所等の先生が最も多く、次いで保健師であった。『相談して気持ちが軽くなった場所』に関しては、子育て支援施設が最も多く、次いで教育・保育施設であった。子育て支援施設が、相談して気持ちが軽くなった場所として割合が高かったのは、母親の気持ちに寄り添うことを重視するスタッフの存在や、自分と同じように子育てする親子の存在があるからだと考える。また、子どもが就園することにより、教育・保育施設が子どもの日常の集団生活の場となることから、母親が訪れる機会が増える。保育者との信頼関係が築かれていくにつれ、相談できる場に変化していく。つまり、子どもの年齢、発達段階、就園状況や母親の就労状況、抱える悩みの種類等によって、求められる支援が異なっていく。このことについては、平林、砂川、藤尾、下山（2016）が述べるように保育・福祉・精神保健といった多職種の連携の必要性と一致していることから、子育て支援には、多種多様な職種との連携が重要であるといえる。専門職に加えて、子育て経験者の情報やアドバイス等は、実際の経験談から得られる生の声であり、説得力を増し、母親の育児不安の軽減につながる。そして、そのような活動が継承されていくことで、子育てネットワークも形成され、母親自身の自己肯定感や自己実現につながっていくと考える。

次に、子育て支援イベント等の情報を提供するために有効的な方法を考える。近年は、ICT の普及により、自宅でも簡単に様々な情報を収集できるようになっている。今回の調査では、『普段の子育て支援に関する情報の収集方法』について、チラシ、子育て支援施設、保健センター等、外に出向いて情報収集をしている件数が 54 件、インターネットや SNS 等を利用して、自宅で情報収集をしている件数が 49 件であった。このことから、検索のしやすさや、利便性から ICT を活用した広報に加えて、育児中の親子が集う施設における口コミやチラシをうまく活用できれば、育児中の母親への情報提供を広げることができ、子育てイベント等の情報周知がさらに徹底できると考える。

今回の調査では『母親が求める存在や場所』について、具体的な記述による回答を得ることができた。その回答を共通カテゴリーで分類したところ、「子どもの遊び場」、「交

流・仲間づくり」、「母親自身の時間確保・気分転換の場所」が求められていた。子どもには、色々な人や物と関わらせたり、家庭ではできないような遊びをしたり、様々な経験をさせたいという要望があり、加えて安全面にも配慮された場、無料で利用できる場、親子で楽しめる場が求められている。また、親同士や子ども同士で交流する場が求められており、その中で、気軽に話ができる関係を構築していくことも望ましいとしていることが推測される。そのためには、継続して交流の機会をもち、関係を深めていく必要があると考える。しかし、積極的に人とコミュニケーションを取る人ばかりではないことにも配慮が必要である。話題や一緒にできる活動の提供をきっかけとし、少しずつ距離を縮めていくことができると考える。さらに複数の親子で遊べるレクリエーションやゲーム、親子で作って遊べる工作等の企画は、親子でも楽しめ、他の親子との関わりも楽しめると考える。

さらに母親が自分の時間や気分転換の場を確保することも求められており、子どもを母親の手から離し、預かって遊ばせ、母親がゆっくりくつろげる時間、裁縫やハーバリウム、ヨガや楽器演奏、合唱などといった、母親が自分の趣味や特技を生かした活動をする場を設けたりすることも子育て支援イベントにつなげていけるのではないかと考える。

最後に、先述の和歌山市における地域の子育て支援事業の利用状況において、「利用していない」と回答した就学前児童の保護者が8割以上いることから、非利用者への対策も重要な課題である。平林、砂川、藤尾、下山（2016）は、地域の子育て支援拠点事業の非利用に至る要因として、事業内容の認知等の「情報周知の不十分さ」、駐車場の有無や自宅からの距離、利便性等の「立地条件」、既にソーシャルサポートや子育てに関する情報を入手できる状態であることから利用のニーズがない、また保護者の就労や子どもの就園に伴い、利用時間が合わなくなった等、「ニーズの不合致」、「対人関係」を挙げている。これらは、子育て中の親子を集める際に考慮すべき事項であるともいえる。

また内閣府（2004）が「いわゆる専業主婦の方が共働き世帯の妻よりも、子育てに対する負担感を感じている人が多い」と述べていることも踏まえ、子育て支援の開催日に関しては、未就園児を対象とする場合は、自宅で子どもと母親の二人だけで、日々を過ごすことに負担感を抱く母親がいると考えられることから、平日に実施することは有意義であると考える。同時に、親の就業や子どもの就園状況を考えると、平日の参加が難しい親子がいることにも配慮し、土曜日や日曜日にイベント等の開催を計画することも望ましいと考える。また、対象とする子どもの年齢を考え、食事時間、午睡時間等にも配慮が必要となる場合も考えられる。場所に関しては、交通の便が良い場所、駐車場や駐輪場が確保できる場所が必要であると考える。また親子での参加は子どもが低年齢である程、ベビーカーや荷物が増えるため、開催場所と駐車場や駐輪場との距離が短い方が好ましい。支援内容に関しては、子どもの遊び場としての環境の充実や様々な体験の機会、親子で楽しめる活動、集った者同士で楽しめたりする活動、母親の趣味や特技を生かした活動、母親が子どもから離れて過ごす機会、多様な育児情報や経験談等の生きた情報を提供・交換できる場、母親が子どもとの関わり方を学べる場、専門職との連携がとれる場等、子どもと母親の双方向の視点から子育て支援の内容を検討する必要があると考える。木脇(2012)が、多様化する子育て支援の事例から取り上げた「預かり型子育て支援」、「カフェ型子育て支援」「男女共同型子育て支援」「少数者対応型子育て支援」等も参考にし、今後の子育て支援のイベント等に活用したい。

今後の課題として、対象に合わせた支援の内容の工夫にくわえて、仲間づくりや交流を深めるための、よりきめ細やかな子育て支援の充実に向けて取り組んでいきたいと考える。

謝辞

本研究に対してご協力いただきました子育て支援イベント参加者の皆様に心より感謝申し上げます。また子育て支援イベント開催に関してご協力いただきました東京医療保健大学和歌山看護学部の先生方、学生の皆様に感謝申し上げます。

本研究の子育て支援イベントは、2019年度大学等地域貢献促進事業「学生共同プロジェクト研究」の助成によるものである。

引用・参考文献

猪野郁子（1995）「母親の育児の悩みと育児感情との関係－松江市在住の幼児を持つ両親の調査から－」『小児保健研究』第 54 巻 第 4 号 pp.473-477

岡本聡子（2015）「母親の育児不安解消における地域子育て支援拠点事業の効果―利用者アンケートを通じた測定と検証―」『創造都市研究 e』第 10 巻 第 1 号 pp.1-12

加茂直樹（2007）「子育て支援はなぜ必要か」『京都女子大学大学院現代社会研究科紀要』第 01 号 pp.1-21

木脇奈智子（2012）「多様化する「子育て支援」の現状と課題－新たなニーズとそれに対応する事例から－」『藤女子大学 QOL 研究所紀要』第 7 巻 第 1 号 pp.37-43

厚生労働省 HP「平成 24 年版厚生労働白書 －社会保障を考える－」 https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/12/dl/2-01.pdf　2020.12.30 閲覧

内閣府 HP「少子化対策」https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/sentaku/s2_4.html 2020.12.30 閲覧

内閣府 HP「平成 16 年版　少子化社会白書」 https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2004/pdf_h/pdf/g1020233.pdf

内閣府 HP「令和 2 年版　少子化社会対策白書」 https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2020/r02webhonpen/index.html 2020.12.30 閲覧

中岡泰子・小川佳代・富田喜代子・加藤孝士・兼間和美・永井知子・横関恵美子・吉村尚美・高橋順子・高田律美・永吉円・中澤京子・三木章代・新居アユ子・湯浅貴実子（2017）「A 県における子育て支援イベントの利用実態」『四国大学紀要』第 49 号 pp.13-22

中山文子（2016）「乳幼児育児中の母親の現状と子育て支援に関する研究～塩尻市乳幼児検診アンケート調査から～」『地域総合研究』第 17 号（Part1） pp.63-72

平林佳奈・砂川芽吹・藤尾未由希・下山晴彦（2016）「乳幼児期の子をもつ母親に対する地域子育て支援の現状と課題」『東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要』第 39 巻 pp.34-41

和歌山市福祉局 こども未来部 子育て支援課（2019）「和歌山市子ども・子育て支援事業に関するニーズ調査結果報告書【概要版】」

和歌山市福祉局 こども未来部 子育て支援課（2020）「第二期和歌山市子ども・子育て支援事業計画【概要版】」